企画・制作／福島民友新聞社 営業局

社会貢献フォーラム in 福島　3.11から10年　地域社会をつなぐ社会貢献

「福島であったこと」を次世代に伝えるために

3.11から10年。「社会貢献フォーラムin福島」が10月2日、福島市のとうほう・みんなの文化センターで開かれた。一般社団法人パチンコ・パチスロ社会貢献機構、福島民友新聞社、福島民報社、全国地方新聞社連合会の主催。物語「フクシマのウシ」の朗読に続き、「地域社会をつなぐ社会貢献」をテーマにパネルディスカッションが行われました。

◀震災で起きたことを「知らなかった」という世代が増えてきた今、「若い世代への継承」や「表現力を育てること」の重要性などがパネリストから提案されました

第一部　村松真貴子さんによる朗読と作者の芥川麻実子さんのストレートトーク

「フクシマのウシ」

東日本大震災によって起こった事実を題材にした芥川麻実子さんの作品を村松真貴子さんが朗読。情感のこもった物語に来場者約270人が静かに耳を傾けました。

朗読中に村松さんは「涙が止まらなくて困った」と言う

「フクシマのウシ」の一場面

朗読　村松真貴子さん

柱をかじり待ち続けたウシの話

（あらすじ）やさしい「お母さん」に育てられた牛のメッシ。あの日、お母さんは「すぐに帰れるだろう」とメッシをつないで出かけました。お腹がすいて柱をかじり待ち続けたメッシはやがて天に召されます。雲の上で一またお母さんの元へいきたい」と願い出たメッシは、犬（豆柴）に生まれ変わり避難生活中のお母さんに飼われます。残した牛を思い泣いていたお母さんは犬にメッシの面影を見つけ笑顔が戻りました。

ストレートトーク　芥川麻実子さん

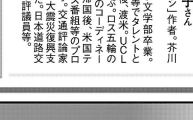
福島へと続く道　復興への道

震災当時、道の駅「八王子滝山」（東京都）で駅長をしていた私は、八王子の農業生産者から「ウシがかじった柱」の写真を見せられました。3・11は東京も大きく揺れ、愛犬が私を心配して2階まで駆け上ってきました。改めて「一人でお母さんは生きられない」と思ったのが、作品を書いたきっかけです。

何かをしようと3・11から5カ月後の8月に東北3県の被災地を見てまわり、9月の防災週間に道の駅「八王子滝山」で写真展を開催しました。

被災3県のうち、福島では南相馬市の道の駅を紹介しました。駅長さんはスタッフ全員を避難させてからも施設に残って、救援に向かう人たちのために道の駅を開けていました。貴重な休憩地点として、お手洗いの掃除を毎日されていたそうです。

被災地の状況を目の当たりにした私は、それから「心を救いたい」と被災地でコンサートや落語などのイベントをするようになりました。ある仮設住宅の集会所ではイベント後に笑顔でカレーをふるまってくれて、家は失っても、みんなの「心のおうち」は残っていると感じました。



被災地で見て感じたことを10年にわたり発信してきた芥川さん（右）

芥川 麻実子さん
隠ククリ琉球ウシ」作者。芥川麻実子大学女学部卒業。テレビ・ラジオ番組でタレントとして活躍した後、渡米。UCLAで映画を学ぶ。ロス五輪の日本放送連合のコーディネーターを担当。帰国後、米国テレビ局ABCでスポーツ番組の制作デュサーとなり、交通評論家に転じ、東日本大震災復興支援活動を行った。日本道路交通情報センター評議員等。

第二部　パネルディスカッション

3・11から10年 ― 地域社会をつなぐ社会貢献

東日本大震災から10年。震災によって損なわれてしまった地域コミュニティを再び甦らせる取り組みについて。地域社会をつなぐ社会貢献のあり方とは？

風化させないために記録と記憶伝え続ける

パネリスト
菊地 芳朗さん
福島大学うつくしまふくしま未来支援センター センター長

身近な人に語ることから始めてほしいですね

パネリスト
青木 淑子さん
富岡町3・11を語る会代表

地域の人たちにとって居心地の良い場所に

パネリスト
諸田 英模さん
福島県遊技業協同組合連合会理事長

心に笑顔取り戻す思いで10年過ごしてきました

パネリスト
芥川 麻実子さん
道の駅「八王子滝山」名誉駅長
道路環境プランナー

声に出し、手をつなぎ心もつないでいけたら

コーディネーター
村松 真貴子さん
フリーアナウンサー
（公財）「八王子市学園都市文化ふれあい財団」理事長

村松　復興という観点でこの10年間を表すと、どんな言葉になりますか。

菊地　「風化をさせない」という言葉です。震災・原発事故の記録と記憶を未来に伝えていくことが、私たちに課せられた任務だと思っています。

青木　歴史を数直線にしてみたときにどの時点にいるのかをずっと考えて「崩壊と創生の間」にいると感じます。

諸田　種まきした復興事業等が次のステージを迎えようやく「復興の芽が出た」と思います。

芥川　「心に笑顔を取り戻す」という思いで10年過ごしてきました。

村松　私は「心配、気がかり」。震災前はたびたび福島に来ていましたが震災後は来ることができませんでした。皆さまはこの10年、どのような活動をしてきたのでしょうか。

菊地　センター長を務める「うつくしまふくしま未来支援センター」は、震災の直後から支援活動を行ってきました。現在は「子ども」、「地域復興支援」、「企画・コーディネート」の3部門で活動しています。

青木　原子力災害は非常に分かりにくい災害なので、きちんと言葉で伝えていかなければならないと考えて「富岡町3・11を語る会」を立ち上げました。富岡町で富岡町の人たちの言葉で、多くの人に震災を語り継いでいます。

諸田　県内142店舗のパチンコ・パチスロ店で作る福島県遊連は、一般社団法人パチンコ・パチスロ社会貢献機構と連携しまして、NPO法人等からの申請のあった多くの事業の中から、社会的重要度や企画の斬新性などを重点的に選考し、優れた事業計画に対して、共同助成をしています。

主なものは、NPO法人等による復興支援や地域コミュニティをよみがえらせる活動に関するものです。今年度は「富岡町3・11を語る会」の「福島の10年を未来へつなぐ、新たな語り人活動事業」に共同助成をしました。

村松　三者三様のすばらしい歩みです。芥川さんいかがですか？

芥川　そうですね。すごく力強い言葉が多くて。キーワードのいくつかは福島だけではなくて、被災したすべての自治体で言えることだと思います。

村松　震災を知らない、体験していない子どもたちにも伝えていく必要がありますね。

菊地　福島大学では、「災害復興支援学」というお授業を年1回行っています。今年入学した1年生は、震災当時の記憶があいまいです。震災について「知らなかった」と話す学生もいますし「福島復興は終わったと思っていたが、まだまだ続くと分かった」と熱く感想を述べる学生もいます。

村松　「知らなかった」という人たちに伝える役目として青木さんの活動がとても意味をもってくると思います。現在の課題はありますか？

青木　会員の平均年齢は65歳以上です。若い世代を育てたいと思います。人前で話すのに抵抗があるという人が多い理由には、「もっと大変な思いをしている人がいるかもしれないのに、話してもいいのかな」という気持ちがあります。

でも、共感をもって聞いてもらえると自分が生きていること、体験したことが無駄じゃなかったんだと思えるようになるのです。ぜひ身近な人に語ることから始めてほしいですね。

村松　諸田さん、震災後にお店を開けるにあたっては葛藤もあったのではないですか？

諸田　私どものパチンコ店は南相馬市原町区に店舗があり被災しました。在食住に関連するお店が開店したら我々の店も再開しようと震災から3カ月後に再開をしました。当時のストアマネージャーは「地域の一人一人にとって、居心地の良い、大切な場所となれるよう、がんばりましょう」と従業員に呼びかけました。

実際に開店すると「息抜きの場所がやっとできた。ありがとう」と声をかけてくれる方が多く、店舗にとって地域とつながる大切さを実感しました。常に集まれる場所を当たり前に毎日提供し続けることが使命だと考えて今日まで来ました。

村松　県内のパチンコ店が、災害時に駐車場などを開放していることを知らない人も多いです。

諸田　そうですね。発信力がまだまだ足りないと思っています。

村松　芥川さんは、復興への課題はどんなことだと思われますか？

芥川　まずはお話をしましょう。自分の声でお話をしましょうということです。

村松　若い世代に伝えるという点で大学は大きな役割を担っています。

菊地　地域に入って、地域の課題を見つけて、自分で考えていく。そんな学生を一人でも多く育てることが、福島の未来のために必要だと思います。

村松　ようやくコロナ禍の先に光が見えてきました。声に出し、手をつなぎ心もつないでいけたらいいなと思います。

私共は、東日本大震災を乗り越え、未来へと向かう皆さまを支援し続けます。

一般社団法人パチンコ・パチスロ社会貢献機構は、社会貢献事業が社会を支える極めて重要な活動であるとの観点に立ち、遊技産業並びに公的機関、民間団体と連携しながら、文化・芸術の振興や平和で住みよい社会づくり、パチンコ・パチスロ依存問題の予防と解決に取り組む民間団体及び研究機関に対する支援などの社会貢献活動を推進することを目的としています。

助成事業

社会貢献活動を行う団体への助成事業は、当機構の根幹事業です。社会貢献フォーラムin福島に登壇された富岡町3・11を語る会と福島大学には、福島県遊技業協同組合連合会と共同で助成させていただきました。

■2016年年度助成事業
「語り人活動のほか地域展開による避難者の心のケア」事業
NPO法人
富岡町3・11を語る会

■2018年年度助成事業
「「LIFEに寄り添い続ける」包括サポートプログラム」事業
福島大学
災害ボランティアセンター

顕彰事業

遊技業界が全国各地で実施している社会貢献活動を報告していただき、今後の一層活発な活動を期待し、最も優れた取り組みに対して、平成17年から「社会貢献大賞」を授与して顕彰しています。

■第15回 社会貢献大賞
「不登校児童が通うフリースクール「三重シューレ」支援」事業
三重県遊技業協同組合

■第16回 社会貢献大賞
「医療用防護服および オゾン紫外線除菌機器の寄贈」事業
石川県遊技業協同組合
同県金沢支部

POSC　一般社団法人 パチンコ・パチスロ社会貢献機構　https://posc.or.jp